

京林大だより

No.29



絵：卒業生 熊走君

第1回林大祭開催

おかげさまで5年目を迎えた林業大学校、ふり返れば講義・実習ばかりの毎日でした。これまで、学校に地域の皆様をお迎えする機会はありませんでした。

名前は「林大祭」、学生達が相談し「これが一番わかりやすい」と決めました。開催は12月3日(土)～4日(日)。

名前はシンプルに、中身は盛り沢山にしようと学生が手作りで企画。12月3日は林業マンが集まる機会として「木の駅」を開催。

12月4日はアスレチックや講演会、模擬店を開催しました。地元和知の「金曜宵の市」、「わち山野草の森」はじめ、京丹波町内から大阪まで、10件のお店やグループが集まり盛りあげていただきました。

地元の子ども達やご家族連れなど220人が集まりました。小さな林業大学校で、にぎやかなお祭りを開くことができました。

来年はもっと賑やかなお祭りにしたいと思います。皆様、ありがとうございました。



木の駅の荷受け風景。一個ずつ「はかり」で重量を量ります。



わち林業センターでは猟師 千松信也氏の講演「ぼくが猟師になった頃」を開催しました。

ブース・模擬店に参加いただいた方々

金曜宵の市、まどい、山敏会、京しかミーツ、一期一縁、夢たこ、昆虫エネルギー研究所、めだか古書店、サクサクプロジェクト、わち山野草の森（順不同、敬称略）



火のあるところに人集まる。林大祭に焚き火はよく似合います。卒業生も集まり第1回同窓会も開催。



由良川沿いのスギ林では数種類のアスレチックを設置しました。子ども達は大喜びでした。

林政ニュース

国産材自給率が3分の1に

日本の木材自給率は平成14年に18.2%まで下がりましたが、その後増え平成27年には33.3%にまで回復しました。

しかし、その内容を見ると素直には喜べません。前年と比べて木材総需要量は約50万 m^3 減っており、国産材の供給量が大きく増えたわけではないからです。

しかも、国産材の前年からの増加量140万 m^3 のうち6割は燃料材で、前年と比べ110万 m^3 も増えています。

各地で大きなバイオマス発電所が操業し始めており、燃料材はしばらくは増え続けると考えられますが、板や柱になるような良い木を燃やすようなことがあってはなりません。

木造建造物を増やし、板や柱にならないような木を燃料にする取り組みを進めることが必要です。

そのためにも、木材を今以上に供給できるように林業を元気にするために、林業大学校も頑張っていきたいと思います。



山積みされたチップ用材(オーストリアの例)

今月の授業参観

『三林大交流会』

11月24日、25日の2日間「全国林業大学校対抗伐木選手権大会(三林大(長野・岐阜・京都)交流会)」が長野県内において行われました。

この大会も3回目になり、参加人数は97人と大幅に増え、選手権の名にふさわしい規模になりました。

本校からは2年生を中心に参加し、初日は開会式とグループディスカッションを行い、2日目は長野県林業大学校でチェーンソーの組み立てや操作技術などの技術を競いました。

慣れないカラマツに苦戦しながらも、本校生はよく奮闘しましたが、総合優勝は長野県林業大学校でした。

他校と交流も図れ、良い経験になったと思います。来年は本校で開催する予定です。



合わせ切りに挑戦



校長室より

正月はマツ

校長 只木 良也

明けましておめでとうございます。本年も、京都林大よろしくお願ひ申し上げます。

正月といえば門松。そのマツが、里山の利用管理の低迷とマツ枯れ病の蔓延で、姿を消しているのはご承知の通り。京都林大の背景をなす里山の景観からも、簡単にマツを見出すことが適いません。

マツは、日本文化を支えるのに大きな役割を果たしてきました。例えば、京都祇園祭の挽き山には枝振りのいい生きたマツが飾られますし、大文字の燃料もマツですが、マツが消え行くのに伴い、その調達に苦労している昨今です。

奈良春日大社の20年ごとの御遷宮(ここでは御造替という)では、本殿工事中の御神体移転先の仮殿は、マツ材で造るのが歴史的決まり事なのですが、昨年の御造替では、マツの調達は大変だったようです。マツの将来、どうなっていくのか、日本の文化継承にとっても大きな課題です。

さて、マツは常盤木、神宿る目出度い木。とすれば、全48枚を12ヶ月に分け、それぞれに植物を当てはめた花札の、始まり1月(正月)にはマツが当然。ところで、マツの学名(ラテン語)はpinus、スペイン語pino、ポルトガル語pinho、英語pineと、その音はピンなのです。

そして、一天地六賽の目の一はピン。花札は、2月ウメ、3月サクラ、4月フジ、5月カツバタ、6月ボタン・・・と連なって最後の12月はキリ。で、始めから終わりまでのことを「ピンからキリまで」とか・・・。